



勇気を出して声をかけた。すると、

「頑張ってください。応援しています。」

と、温かい言葉を返して頂いた。

「修一が拉致されて四六年です。どうか拉致問題を忘れないでください。一緒に助け出してください。よろしくお願いします。」

と、何度も頭を下げ呼びかけるご夫妻の姿は、弟への思いと問題解決への決意が溢れていた。

そして、拉致現場の吹上浜に行った。砂浜から望む東シナ海は、昨年視察した横田めぐみさん拉致現場の波高い日本海とは対照的に、

「本当にここで？」と思うほど穏やかだった。

二日後、市川さん宅へ再びお伺いし、修一さんが初給料でお母様のトミさんに贈られた

「大島紬」を見せて頂いた。お母様は「修一が帰って来たらこれを着て出迎える」と言われていたが、袖を通すこと無く亡くなった。

「毎年干すけれど親の有難みを感じるよね。」

と涙ながらに語る妻龍子さん。そしてお母様が修一さんの誕生日に綴られた一文字一文字

に愛情のこもった手紙、タバコ、レコード、  
凶鑑など修一さん愛用の品々。全て四六年前  
のあの日から時間が止まったままだ。私も涙を  
堪えることが出来なかった。「私に出来るこ  
とを全力でやるしかない、もっと同世代の仲  
間を集めなきゃ。」と改めて決意した。  
ご夫妻は最後に語られた、  
「拉致から四六年も救い出せない。こんな日  
本でいいのか。一国民として、一刻も早い拉  
致被害者の全員救出に何が出来るだろうか、  
と自分事として考えて欲しい。若い皆には親  
の有難さを感じながら、もし自分の家族が：  
と想像してほしい。」  
と。拉致問題は過去の出来事ではない。現在  
進行形で大切な人を待ち続ける家族がいる。  
関心を持ち応援することに年齢は関係ない。  
国と国の難しい問題だからと遠ざけず、正し  
い情報と拉致被害の現実が沢山の人に伝わっ  
て欲しい。拉致被害者全員の「ただいま。」の  
声を聞くその日まで私も諦めない。